WEB を多読的要素として利用した英語授業実践事例

Educational Report in English: A Case Study of Using WEB as Extensive Reading in English Classroom

関戸冬彦*
Fuyuhiko Sekido

Email: fuyuhiko@dokkyo.ac.jp

本稿では、WEB を多読的なアプローチで用いた英語授業の実践例を紹介する。具体的な授業としては、2010 年度獨協大学国際教養学部英語演習Ⅰ、Ⅱ（木曜４限）にて行ったものである。この授業の主な焦点は、学生各自の自発的学習にある。活動内容の中心は海外発信のニュースサイトを検索し、多読的に WEB を読み、グループ内で発表することである。その後の活動や問題点、評価、活動時間、さらには学生からの反応などについてもあわせて記す。

This paper reports on the use of the Web as a resource for prompting Extensive Reading in English language classrooms. The report stems from teaching episodes in Seminar I & II classes in the Faculty of International Liberal Arts at Dokkyo University in 2010. The central discussion of this paper concerns the ways in which the teacher facilitated the independent engagement with the Web as a learning resource. Students were required to search for appropriate websites, mainly articles from overseas news media, and read them as Extensive Reading. Student interview data will be introduced to show the effectiveness of this way of teaching.

*: 獨協大学国際教養学部

1. はじめに

本稿では WEB を多読的なアプローチで用いた英語授業の実践例を紹介する。言うまでもなくインターネットは現在情報収集に必須のツールである。例えば就職活動をしている大学生たちは各会社の概要や企業合同説明会の情報を WEB でいち早く、しかも正確に得ようとする。なぜならアクセスする速さと情報の正確な理解こそが将来につながるからだ。では例えばそれらの情報が英語で書かれていたらどうであろうか。日本語であっても情報を把握する際には誤解のないように注意がいるのだから英語であればなおのこと慎重に、しかしそれでも速さは保っていたい。そうした観点に立った時、一定の時間内に英語の情報を素早く把握し、かつそれを英語で発信できる能力を授業内で養ってみようと思ったのがこの実践、活動の発端である。本稿ではこの授業内活動に必要な教室のスペック、対応できる学生の人数、活動に必要な準備、学生への指示などを執筆者の実践例をもとにして示す。具体的な授業としては、2010 年度獨協大学国際教養学部英語演習Ⅰ、Ⅱ（木曜４限）にて行ったものである。英語演習とは国際教養学部の３、４年生向けの選択科目（週１コマ）であり、1 クラス約 30 名が原則的上限、Ⅰ(春学期)、Ⅱ(秋学期) 共に上限に到達した約 30 名が履修した。

2. 教室などの環境

2.1 教室仕様について

まず WEB を使用した授業を行うにあたって、一番望ましいのは PC 教室の使用である。教員機が多機能を伴った、最新の CALL システムまで搭載されていなくとも、学生用 PC がインターネットに短時間で接続できる環境であればこの活動には十分に対応できる。獨協大学の場合、天野貞祐記念館（A 棟）の２階が PC 教室の並ぶフロアとなっており、この授業においても２階にある A-204 教室（写真１）を使用した。この教室の特徴としては４人がひとつの班になるよう対面・島式になっているところが挙げられる。後に紹介するように、諸々の活動は教室のこの特徴を生かすようにして行った。本来は PC 教室の特徴である教員機の仕様なども詳細に紹介すべきなのだが、上記のようにこの活動で重要なのは教員機のスペックよりも学生が PC を通じてインターネットに素早くアクセスできる状況にあることなので、また教員機のスペックに関しては筆者自身が特筆するほど活用したわけでもないので、本稿ではこれ以上触れないこととする。

写真 1

2.2 学生数について

学生数は、以下に紹介する活動内容、特にグループ活動、を考慮に入れると少なすぎても多すぎてもやりづらく、学生個々の能力を把握するためにも、また出席などといった事務レベルのことを考えても、大所帯すぎない語学クラスのサイズが望ましい。その点、先に述べた約 30 名という学生数は適切な数と言える。この約 30 名を教室仕様にならって４人ずつまとまって座らせ、基本的には（授業開始の際には）毎回同じ席に座ってもらい、出席もそれを基準にして確認するようにした。

2.3 PC 教室における問題点

上記のように、授業内に PC を通じてインターネットにアクセスできる環境としての PC 教室は大変すばらしいのだが、たまに問題が起きる。まず、ログインするためには学生個々の ID が必要で、これを忘れたり紛失したりしてしまうと困る。また、ログインできたとしても、30 台近い PC をほぼ同時刻に立ち上げようとするとシステムに負荷がかかってしまうのか、起動速度が大変遅く、何も出来ずにただ待っている、という状態になってしまったこともあった。つまり、当然ではあるが PC がきちんと起動し、WEB にアクセスできないと PC 教室では授業や活動がうまくできないという点が特徴の裏返しとも言える。加えて、ヘッドセットなどが故障しているために音声が聞けない、といったトラブルもあった。

3. 具体的な活動内容

3.1 ニュースサイトを検索、多読的に

さて、実際の授業、WEB を多読的要素として用いた活動、ではインターネットの英語情報にアクセスするところから始まる。英語情報といってもある程度指示を出さないと収拾がつかなく、学生も何をどうしたらよいのかわからないので、最初は新聞・ニュースの WEB、中でも代表的なもの、例えば ABC、CNN、The Japan Times、Daily Yomiuri など、を紹介し、試しに見てもらった。そして、これらのサイト内をいろいろとジャンプしながら各自興味が持てそうなジャンル、WEB ページを探す。政治、経済、スポーツなど、サイト内にあるものであれば内容は問わない、と指示した。つまり、トピックの選定やレベルコントロールに関しては学生たちに自主性に任せ、教員側からの統制は基本的にしなかった。ただし、こうしたサイトの英文をやや難しく感じる学生もいることを考慮に入れ、比較的易しめの CNN Student News や週刊 ST のようなサイトもあることはあらかじめ説明しておいた。

また、ニュースのサイトであれば現在は大抵音声だけでなく動画もあるので、必要な際には各自ヘッドセットを使用して、動画を見ながら、音声を聞きながら、内容を確認する。中にはスクリプトとしてキャスターが読んだ原稿がそのまま掲載されているものもあり、英文を読みながら聞くことも可能である。こうした WEB リサーチにかける時間は約 15 分とし、この活動を「多読的」と位置づけた。

「多読的」と称することに関しては、ここで少し説明しなければならない。昨今、英語教育界で言われている多読とは、「第二言語によるリーディングを指導し、学習する方法の１つで、学習者は各自の言語能力の範囲で十分可能な大量の書物や他の読書材料を読むというもの」[1]を指す。具体的なテキストとしては様々な洋書出版社が出版している Graded Readers、絵本のようなレベル１からペーパーバックに近いレベル６まで使用語彙が段階的に設定されているもの、を自分のレベルに合わせて各自が選び、なるべく数多く読む、というのが一般的認識であるが、この活動においてはそのコンテンツを「Graded Readers」から「英語で書かれた WEB」に切り替えた、というスタンスに立った。その上で、時間内に自分が読める量、内容、レベルを各自で判断し、選択するという点、教員主導ではなく学生主体、に関してはいわゆる多読方式と同じ方向性を持っている。本稿タイトルの WEB を多読（音声のみの場合は多聴）的要素として利用した、というのはこの点を指す。

3.2 WEB 多読後の活動

こうして各自がニュースや新聞に WEB を通して多読、多聴的に触れた後は、触れておしまい、ではなく、その概要を手短に把握してもらう。具体的には、専用の用紙（Appendix 1）にその要約を日本語ではなく英語で書くという作業をしてもらう。つまり、「英語」で書かれた WEB に関する「英語」の要約を作る。ここでなぜ日本語ではなく英語で作るのかというと、この要約は次に行う英語を用いた活動の準備も兼ねているからである。要約を作る際のポイントとしては、いつ、どこで、誰の、何の話なのかを出来るだけ正確に把握するよう指示した。この要約を作成する時間も、大体 15 分が目安である。

その後、４人で１チームを作りチーム内で順番を決め、各自がどんな WEB を見たのか、その内容は何なのか、を作った要約をもとにしながら英語でプレゼンテーションをする。必要な場合は各自の PC のそばに集まって、画像などを示しながら説明したりもする。先にも述べた通り、教室の仕様上そもそも４人１チームの状態で座っているのでこの活動への移行は大変スムーズに行える。また、要約を英語で書くというのは、この英語でプレゼンテーションを行う、という活動があるからである。要約を日本語で書き、それを通訳的に英語でプレゼンテーションするということも出来たが、通訳や翻訳がこの活動のねらいではないので、この授業においては日本語での要約を作るという活動は行わなかった。

各自のプレゼンテーションを聞いている間、他の３人は要約の際に用いた専用用紙裏面の評価欄（Appendix 2）に各自の評価を記入、４人全員が終わった段階でその日の Who is the best?を記入し、フィードバックを行う。また、プレゼンテーションでは伝え切れなかった部分もあろうとの配慮から、最後に各自が作った要約をチーム内で２人ずつ２つのペアを作り、お互いに要約を今度は文字媒体として読んで確認し、コメントを記入して終わりとした。

3.3 多読後の活動の問題点と成績評価について

これらの活動において実際に起こった問題点を以下に述べる。それは先の４人ずつ座るという教室仕様とも重なり、メリットが時に逆にデメリットになった。具体的な問題点としては、まず、最初から全員４人になって揃っていればよいが、誰かが欠席していたりすると４人になれず、また PC を立ち上げてしまい、しかも ID にてログインしているので、グループ活動（プレゼンテーション）のために改めて場所を移動するとなると再度その空席であった PC

を立ち上げることになり、アクセスに時間がかかる。それを避けるためには最初から４人になれるよう順次座らせていけばよいのだが、授業者の方針として授業開始時に出席を明確にしておきたいという理由から座席指定制にしていたので、その点と相まって毎回必ず全員が４人チームをうまく作れたわけではなかった。

成績評価に関しては、毎回活動後に上記の専用用紙を回収するので、それをもとにして行った。そもそも、授業全体の評価配分を、出席点 30%、授業内課題点 40%、最終評価（テストならびにレポート）点 30%、としていたので、この活動だけで大きな意味での成績評価をしたわけではない。この活動は上記中の授業内課題点の範疇として扱った。プレゼンテーションに関しては同時多発的に各班（島）にて行われているので、全員のものを最初から最後まで通して授業者が聞けるわけではないのだが、発表態度や発表時間などを見ていると、また複数回チェックしていると、各学生の能力は回数を重ねるごとに自然と把握できてくる。また、毎回 Who is the best? としてその日チーム内で一番よかったプレゼンターの名前と、その選んだ理由を書いてもらっているので、そうした点も各自の能力を把握する際の参考にした。要約の部分に関しては適切な量、わかりやすさを基準に毎回確認し、数段階にわけてチェックしておいた。最終的にはそれらをすべて点数化し、授業内評価点としての点数に換算した。

なお、最終評価に関しては Steve Jobs（アップル社の CEO）のスピーチ動画を見てもらい、ディクテーションと内容に関する問題をあわせたリスニング的テストと、これまでの活動の応用として、何らかのニュースをひとつ自分で選び、要約とコメントを書くレポートを課し、それらを合算して点数をつけ、全体の評価に反映させた。

3.4　活動時間とまとめ

活動時間に関しては、これまでの流れをまとめると、諸々説明を伴う第一回目を除き、一連の流れにかかる平均的時間は WEB 探しから最後のペアワークまで、WEB リサーチに約 15 分、要約作成に約 15 分、プレゼンテーションに約 15 分、の合計約 45 分で完了する。学生たちの中には慣れてくるとこちらが指示しなくとも授業前から PC にログインし、WEB を探し始めていたりもするので、さらに時間が短縮できる。また、学生によっては早々と要約を作り上げ、関連するページにジャンプしたりしている者もおり、そうした学生は自発的に WEB を多読していくことになる。

この活動の狙いはこのように一定の時間内にたくさんある情報の中から自分に必要なものを探し出し、それを他者に伝えていくことにあり、もちろん「多読」と称するからには「多読」としての様々な活動方法やルール、また Graded Readers の適切な使用が奨励されているのは熟知しているが、本活動はそれを WEB に切り替え、WEB 上の多くの情報を読む「WEB 的多読」としての活動を試みたものであった。

なお、これらの活動後の 45 分は、春学期は大学生向け教科書『CNN:ビデオで見る世界のニュース(11)』（朝日出版社）を用いてさらなるニュースのリスニングやリーディングを行い、秋学期は映画を用いたリスニングやプレゼンテーションなどの活動を行った。

3.5　学生からの反応

こうした WEB 多読を学生たちはどう思っていたのだろうか。本稿を執筆するにあたり、2010 年度英語演習Ｉ（春学期）を履修してくれた学生若干名に今振り返ってどのように感じているかを自由記述形式で E メールにて尋ねてみた。以下、それらの回答をいくつか集約して紹介する。まず WEB 多読ではこれまであまりアクセスしなかった英語ニュース WEB に毎週したことはいい経験となり、それを読み、聞き、グループプレゼンテーションをするためにまとめることは責任感と緊張感を伴うため、英語や内容にわからない部分があってもそれをわかろうとする、学習への積極的姿勢が授業中に生まれたという。苦労した点は、自分で好きなページを選べる半面、面白そうなものがなかなか見つからない日もあり、そういうときは諸々時間がかかってしまった、とのことだった。また、たまに同じグループの学生と全く同じ WEB ページを選んでしまい、それを二番目にプレゼンテーションしなければならなかったときは、英語的にも内容的にもよりいいものを、とのプレッシャーがあり、それはまた自分との表現の違いを学ぶことにもなったので、思わぬ学習だったという。以上、自由記述形式だったので客観的な数字としてのデータを示すことは出来ないが、活動全般としては概ね好評価であり、学習経験としては有益であったと判断している。

4.　PC 教室が使用できない場合

2010 年度は幸運にも PC 教室にて授業を行うことが出来たが、教室の稼動数やその年の事情などにより、いつでも PC 教室が使用できるとは限らない。通常教室にて学生に自身の PC、あるいは大学からの貸出用 PC、を準備させれば同じことができるかもし

れないが、毎回必ず全員にそうした準備を課すのは難しいように感じるし、また持ち込みの場合は準備に手間がかかり、肝心の活動を始めるまでに時間をかかることも懸念される。よって PC 教室が使用できないと判明したら、PC を使用せずに上記の活動に近い環境を整えられるよう発想を転換する必要がある。つまり、WEB 多読の WEB の部分を何かに置き換えなければならない。その代用品として一番手ごろかつ有効なのが紙媒体の新聞である。この活動に関してはすでに 2009 年度に実践し、拙論(2)にて紹介したので、詳細は本稿にては省略するが、簡潔に説明すると、普通の英字新聞を真ん中から切って一枚の紙にし、それを人数分以上持っていく。それらを学生は自発的に選んで読み、要約とプレゼンテーションを行うというものである（専用用紙は図１、２と同じものを使用)。よって、本稿で紹介した活動は、以前の紙媒体から WEB に移行した実験的試みでもあった。

なお、WEB と紙媒体とを比べるとよい点悪い点、それぞれがある。紙媒体のよい点としては、書き込んだり下線を引いたりと、語彙などをチェックする際にはやりやすい。悪い点は二つ、主に授業運営に関して、ある。一つ目は、新聞を入手し、また必要に応じて授業用にどこかで保管しなければならない。幸いにも無料にて提供してもらえる環境にある場合はそれを活用させてもらうが、全て自分で購入しなければならないとなると、学生が自分で買うとしても、あるいは教員が準備するとしても、毎回金銭的負担が発生する。二つ目は、上記に伴って、その日の新聞を読もうとするならば授業のために毎回購入しなければならない。しかし、WEB はその点無料なのに加え、タイムリーな話題を素早く、かつ他紙のサイトと比べながら横断的に読めるなど、WEB の利便性は紙媒体にはるかに勝る。よって、紙媒体のようには扱えないものの、情報としてのメリットはとても大きい。無論、書き込みのような作業が必要ならばプリントアウトすることで紙媒体と同じようにはなるが、学生全員が各々のものを印刷するとなると毎回膨大な量の紙を消費することになるので授業者としては好ましく思えず、そうした指示は今までにしたことがない。

5.　おわりに

本稿では獨協大学国際教養学部英語演習Ⅰ、Ⅱにおいて行った、WEB を多読的なアプローチで用いた英語授業の実践例を紹介した。これまで述べてきたように、WEB を用いることで学生たちはたくさんの情報を瞬時に入手でき、またそれを授業内活動、要約とプレゼンテーション、を行うことで英語力向上につなげることが出来た。今後の課題としては、４で述べた、紙媒体での活動とのさらなる比較や紙媒体と WEB を併用した授業実践を行い、その効果などについて考察を試みてみたい。

参考文献

(1)　リチャード・R・デイ、ジュリアン・バンフォード “多読で学ぶ英語” p.iii、松柏社 (2006.7)

(2)　関戸冬彦 “英語教育実践報告：2009 年度「英語演習Ⅰ・Ⅱ」における様々な試み” 獨協大学国際教養学部言語文化学科紀要　マテシス・ウニウェルサリス、第 12 巻、第 1 号、　pp. 163-186 (2010.11)

Appendix 1

Summary sheet for News & Articles

Date: /　/　, Class:_____　　Seat No._____

Student's Number_____　Name_____

Article's Date__/ /__, Name:_____Page._____

Article's topic _____

Summary: _____

_____

_____

_____

_____

_____

_____

_____

Your comments:_____

_____

_____

Partner's evaluation:

English：A　B　C　D

Contents: A　B　C　D

comments:_____

Appendix 2

Evaluation sheet for presentation

Date: / / , Class:_____Seat No._____

Student's Number_____ Name_____

Your topic _____

Presenter Total Evaluation

1 _____ _____

English：A B C D

Voice & Attitude: A B C D

Contents: A B C D

Today's topic _____

Memo

2 _____ _____

English：A B C D

Voice & Attitude: A B C D

Contents: A B C D

Today's topic _____

Memo

3 _____ _____

English：A B C D

Voice & Attitude: A B C D

Contents: A B C D

Today's topic _____

Memo

Who is the best? No. /Name _____

Comments:_____

(2011 年 9 月 30 日受付)
(2011 年 12 月 21 日採録)